

愛知教育大学附属養護学校「武道場(現・作業実習棟)」と 同時期に建築された県内学校建築の現況

小川正光* 樋口一成** 櫻井俊雅*** 藤江 充**
橋田紘洋**** 宇納一公** 稲毛正彦*****

*家政教育講座 Department of Home Economics

**美術教育講座 Department of Fine Art

***施設課 Section of Building and Repairs

****技術教育講座 Department of Technology

*****理科教育講座(化学) Department of Science (Chemistry)

Todays Situation of Educational Facilities in Aichi Prefecture Built in Same Period with “Military Arts Gymnasium (Present Practical Working Block)” of Aichi University of Education Nursing School

Masamitsu OGAWA Kazunari HIGUCHI Toshimasa SAKURAI
Mitsuru FUJIE Koyo KITSUTA Kazuhiro UNOU Masahiko INAMO

1. はじめに

今日の大学において、研究・教育を行うのに望ましい環境を整備することは重要な課題のひとつである。効率的で利便性の高い環境や、自然に恵まれ、リサイクルを考慮した環境を整備することも重要であるが、歴史的な環境の中で生活することも、落ち着いて深い思考を養う環境としては重要である。この点から、多くの大学では、創立当初からの建築を残し、実社会からは距離を置いた環境で、歴史の長い過程の中で思考することを追求している。

本学の刈谷市に立地するキャンパスは、1970(昭和45)年に統合によって形成された新しいものであるが、岡崎市の師範学校を前身とする敷地内には、大正期に建てられたものとして「武道場」(現・附属養護学校「作業実習棟」)が唯一残り、当時の様式により、落ち着いた、モダンな雰囲気を留めている。これを見るだけで、本学の歴史性と伝統が感じられる建築である。他に歴史的な建築を残していない本学にとって、貴重で、重要な歴史的建築である。

この「武道場」を対象に、本学の歴史の中における位置付けと、建物の実態について、文献と卒業生に対する聞き取り調査、建物の実測と図面の作成により、明らかにした¹⁾。その結果、建築的には、高等教育を受けた、わが国で最初の建築家たちが設計した、最

初期の鉄筋コンクリート造で、屋根は木材と鋼材を組み合わせた特徴ある建築であることが明らかになった。また、本学の歴史的側面からも、戦時中の空襲に対して寮生の消火活動により残された建物であり、附属中学校、附属小学校、附属養護学校が使用してきているため、各校の歴史の中に登場する、かけがえのない建築であることが分かった。

このような重要な建築物を、改修・保存し、日常的に活用することは重要であるが、竣工後約80年を経過していることと、当時必要とされた強度と今日のそれとが変化しているため、耐震性などの構造の側面から検討する必要がある。現状における材料の劣化調査、耐震診断の結果については、別に報告している²⁾。本稿では、愛知県内において、同様な時期に建築された、類似の学校建築物の抽出を行い、それらにおいて、現在、どのような改修・保存がなされているのか、という実態調査結果を報告する。このような研究を通じて、本学の対象建築物を改善・活用方策を検討する上で、示唆を与えることを目的とする。

2. 研究の方法

本学附属養護学校の「武道場」が設計・建築されたのは、本学が師範学校であった時期で、設計は、愛知県営繕課による。当時の県営繕課が設計した主要な教

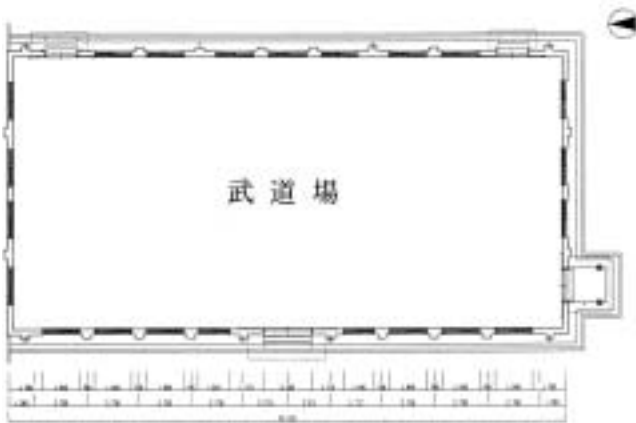


図1 「武道場」平面図



図2 南立面図



図3 西立面図

育施設は旧制中学校であった。したがって、同様な仕様により建設されたと考えられる同一設計組織による旧制中学校のうち、現存する建築物を、主要な対象として選定した。

それらを訪問し、現地において実態調査を行い、歴史的経緯と使用実態を聞き取りと観察・写真撮影により採取し、図面などの資料収集を行った。耐震補強を実施した事例については、補強・改修を実施した愛知県建設部建築担当局公共建築課より、計画図面、耐震判定などの資料を収集し、補強・改善内容についても把握した。調査時期は、2007年1,2月である。

3. 本学「武道場」の歴史的な経緯と建築的特徴

3.1 歴史的な概要

愛知県第二師範学校の設立は、1899（明治32）年4月であるが、現在の岡崎市六供の敷地を使うようになったのは、寄宿舍の一部が完成した1901（明治34）年からである。1903（明治36）年に校舎が完成し、その後、講堂、各種特別教室を建設して充実させている。1923（大正12）年には、愛知県岡崎師範学校と改称されている。

この「武道場」の建築時期は1926（大正15）年2月である。当時の校舎は、敷地の南半分に配置されていた。校舎は、東側から、寄宿舍が4棟並行に、中央に師範学校の教室、西の位置に附属小学校、という順であった。敷地の北半分は運動場で、運動場の東端に、「武道場」が南北軸に配置された。当時は、主に剣道場として使用されていた。

1943（昭和18）年に愛知県から国に移管され、愛知県第二師範学校に改められる。本土空襲は44（昭和19）年から始まっているが、45（昭和20）年の岡崎市空襲により師範学校のほとんどの校舎は焼失した。この「武道場」は、寮生の必死の消火活動により残すことができた唯一の師範学校当時の建物になった。

1947（昭和22）年、附属中学校が「武道場」内を教室に仕切り開校している。附属中学校が愛宕山へ移転した後（1951（昭和26）年）、附属小学校の「集会場」となり、附属養護学校が開校した1967（昭和42）年には「雨天体操場」として附属養護学校に整理換えされ、現在に至っている。

附属養護学校では、記念式典、行事などに「講堂」として使われ、舞台、暗幕等も徐々に整備した。現在は「作業実習棟」とし、南半分で作業訓練の実習を、北半分を学芸会で使う大道具を収納する場として使用している。

以上で検討したように、この建築物は、本学に残る最も古い、大正期に建てられたもので、前身である師範学校以降、学生の努力で空襲を生き延び、附属中学校、小学校、養護学校の校舎として使われ、本学を構成する各学校組織と深い関係を持ってきた点から、本学を象徴する重要なものと考えられる。

3.2 本学「武道場」の建築的特徴

設計は、建築時の所管であった愛知県の営繕課と考えられる。同時期に建築された県内の旧制中学校の校舎と類似した鉄筋コンクリート造建築である。公共建築に鉄筋コンクリート造を採用するようになったのは、関東大震災後であることから、わが国でも最初期の鉄筋コンクリート造である。慣れない構造体であることから、慎重な設計で、後の鉄筋コンクリート造と比べても、高い強度を確保しているのが当時のコンクリート造建築の一般的特徴である。図1～3に、現状の実測図を示す³⁾。

躯体は鉄筋コンクリート造で（写真1）、屋根の骨組みは、木造と鋼材を組み合わせた、非常に珍しい構造になっている（写真2）。特に、屋根を混構造にするものは少ない。壁は厚く、レンガ造の壁をコンクリートに置き換えたことを感じさせる。壁には柱を付け、柱頭には直線で簡略化した装飾を配置している（写真1）。木製の支柱や通風口の蓋にもみられる斜線を多



写真1 「武道場」南立面



写真2 屋内のトラス



写真3 床下換気口

用した装飾は(写真3),アール・デコ様式と判断され、全体の構成と調和している。

小屋組は、圧縮部分に木材を、引っ張り部分に鋼材を組み合わせ、接合部には特別の金具とボルトを使って構成する(写真2)。同様な事例は少ない。鋼材の組み合わせは、軽やかな感じを屋根裏に与えている。木部の構成には、和風の木組みを感じさせる意匠も見られる。

屋根は、現在は亜鉛鉄板葺きであるが、当初の写真から判断すると、底部分も含めて、瓦葺きであった。

壁の躯体は鉄筋コンクリート、外部はモルタル塗り、内部は漆喰塗りで仕上げ、木部は黄緑のペンキ仕上げである。外部でも当初のペンキが残り、保存状況はきわめて良く、壁面の破損も少ない。ただ、屋根の雨漏りが進行して小屋組に腐食が見られるため、早急な補修が必要である。

以上のように、本建築は、わが国における鉄筋コンクリート造の最初期の事例であり、屋根の小屋組が木材と鉄骨材を混合させた特殊な構成で、アール・デコの洋風様式と和風の様式による装飾を配置している点からも、貴重な建築事例と判断される。

4. 同時代に建設された類似した学校建築物の現況

大正期から昭和にかけて建築された旧制中学の校舎の、構成と配置は定型化されていた。校舎の構成は、大きく分けると、教員が使用する管理棟である「本館」、生徒が使用する「教室棟」と「生徒控所」、「武道場」、「講堂」の5つの棟に、「寄宿舍」が加わっていた⁴⁾。その後、教育内容の変化により建物の用途が大きく変わった「教室棟」、「本館」は建て替えられていったが、これらから独立して建てられていた「武道場」と「講堂」には、取り壊しを免れ、現在も残っているものが見られる。

4. 1 半田高校「武道場」(現・卓球場)

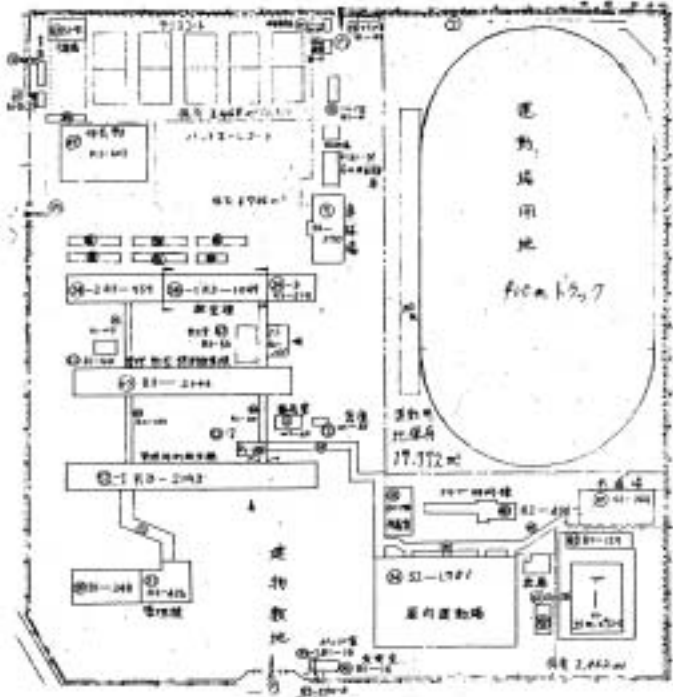
半田高校の前身である県立第七中学校は、1919(大正8)年に開校している。同年1月に起工し、翌1920(大正9)年に教室棟2棟が竣工し、引き続き「本館」、「講堂」、「生徒控室兼体操場」、「寄宿舍」などが完成

し、1924(大正13)年3月に新校舎落成式を行っている。設計は、愛知県営繕課の足立武郎技師とされている。その後、「特別教室」の東側に「武道場」が建築されることになる。現在の半田高校の敷地内では(図4)、校舎の東側、北側の奥に、東側の運動場に面して南北軸に立地する。昭和の後期までは、「武道場」として、柔剣道を行う場として使用されていた(写真4,5)。さらに、運動場の南東の位置に新しい「武道場」が建築されたため、対象となる「武道場」は、「卓球場」として使われるようになった。

卓球場として使用していたが、現在は、同校の歴史的な資料を展示した「資料室」として北半分を使用し、南側半分を「会議室」として使用している(写真6)。資料は、陳列棚に入れられているが、配置の密度は高く、現在は未整備な状況にある。それは、正門と校舎の間の西側にあった「同窓会館」を建て替えるため、現在取り壊した段階で、同館内の資料をここに一時的に運び込んでいるためである。会議用の机・椅子の間隔も狭く、現状では使えないため、「同窓会館」が完成するまでは鍵を掛けたままになっている。窓にはカーテンが掛かり、内部は薄暗い。

建物の出入り口は、東西2箇所にあるが、正面は西側である(写真4)。西側正面入り口には「七中記念館」という表札が下がっている。この建物は、卒業生にとっては懐かしいものであるため、歴史的物品とともに、建物も残していくことを決めている。風を避け、上下足を替える付属の場が設けられ、両開きの大きな扉が二重に付けられている。運動場に面した東側の扉は一重である。屋内側の東西の扉は、現在は敷居に載るものに改造されている。かつては、上から吊り下げる構造で、開閉を容易にしていた。東側の扉は使われることなく、板で閉じられていた時期もあったという。東側入り口の階段はモルタルで、かつての花崗岩の階段は消失している。庇も新しく修復されたものである。

壁面までが鉄筋コンクリート造で、壁は厚く、基礎から一体的に建ち上がっている。一部の柱には付け柱が付き、柱頭部には簡略した装飾が施されている。コンクリート部のひび割れは少なく、構造としては強固であることがうかがえる。基礎には、床下の換気口が



*)「武道場」は、現在、「卓球場」とされている。

図4 現在の半田高校配置図



写真6 屋内から西側入口を見る



写真4 「武道場」西立面図



写真5 南立面図



写真7 天井を支える付け柱

適宜配置されているが、その換気口の蓋は簡単な金網で、後に取り替えられたものではないかと推測される。

屋根の小屋組は木造で、瓦は、東側入り口上部の庇などが一部変更されているものの、竣工時からのものが残されている。当初の雨樋は、付け柱の中を通るものである。

屋内には天井が張られて屋根構造は見えないが、トラスを形成すると思われる斜めの材が天井から出ている(写真7)。隅の部分には、空気孔が設けられている。雨漏りの後は見られず、瓦屋根の施工は有効だったと考えられる。窓枠も、竣工当時のまま、木製のものが残っている。床板は、新しい木製フローリングに張り替えられている。

建物としての基本的な構造・部材は、多くが残っていることから、強固なものであることがわかる。修復部分には、竣工当時の形態を忠実に踏襲していない部分もあるが、屋根瓦や窓枠も、当時のまま残している

貴重な建築物で、同校関係者と同窓会では、改修と活用を強く望んでいる。

4.2 西尾高校「武道場」

本学附属養護学校の「武道場」より遅れて建築されたが、ほぼ同じ規模・構造である。壁は鉄筋コンクリート造、屋根は木材と鉄のトラス構造と同一で、本学「武道場」を位置付ける上で、着目される。しかも、西尾高校の「武道場」は、昭和後期に改造され、今回、耐震補強を中心とした改修も行っているの、その整備内容からも学ぶことは大きい。

旧制西尾高校は、1926(大正15)年4月に設置されている。1927(昭和2)年に、東西軸で並行して配置された「教室棟」と、それらに繋がる「生徒控室」が完成し、1929(昭和4)年に、北側の「教室棟」、「武道場」が、南側の「本館」が1930(昭和5)年に、その西側に繋がった「講堂」が1933(昭和8)年に竣工している。敷地の東側に運動場を、西半分到校舎を配

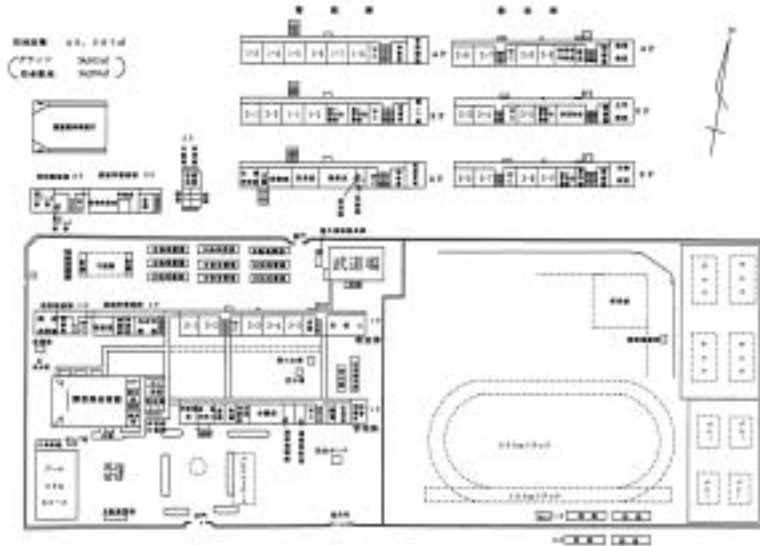


図5 現在の西尾高校配置図



写真9 改修中の屋内東面



写真8 「武道場」東立面



写真10 付け柱と裏面に付設した水平ビーム

置する方法や、校舎の構成と配置は、半田高校とほぼ同様である。現在、当時の建築物は、「正門」、「本館」の一部になる「車寄せ」部分、「武道場」が残されている（図5）。一部が残る「車寄せ」の入口はアーチ状になり、上部中央や柱状の部分の装飾は、全体としてまとまった印象を与えている。

現在も「武道場」は、西側半分を柔道場、東側半分を剣道場として使用している。特に剣道は盛んな地域で、強いということである。また、体育館を使う全学的集会にならない規模の学年集会に、年3回ほど使用されている。

竣工当時、この「武道場」は、南側中央に正面の入口部分が張り出し、その入口部分の東西両方から出入りできるようになっていた。北側にも出入り口はあったが、外部に庇が付いているだけである。東立面は（写真8）、附属養護学校の南立面と同様であるが、装飾的な印象が強い。

壁の躯体は鉄筋コンクリート造で、基礎と一体になっている。その上に、木材と鉄を組み合わせたトラス構造の小屋組が載り、屋根は瓦で葺かれている。圧縮力がかかる上部に木材を使い、引っ張り力がかかるトラス下側に鉄のパイプやブレースを用いる小屋組は独自で、天井が張られていないため軽やかな印象を与える（写真9）。この小屋組は、本学の「武道場」と同

様である。木質部分と鋼材とを繋ぐ金具やボルトの数も同様である。ただ、桁行き方向において、外側の列の水平面に入っているブレースは、附属養護学校の場合にはクロスしているのに対し、西尾高校の場合には一方だけという差がみられる。屋根の小屋組を壁体に取り付ける構造も、同様である（写真10）。

壁体の外部をみると、壁に柱が付けられている。柱の頭部には様式的な装飾が付いている。また、壁面にも水平方向に走る装飾が施されている。附属養護学校の場合には壁面の装飾はないため、西尾高校の方が華麗に感じる。雨樋も、附属養護学校の場合と同様に、柱の中に隠すように工夫され、すっきりした印象を与える。底部分も、鉄筋コンクリート造で、躯体と一体的に造られている。注目されるのは、東側の妻面には窓、柱が付けられているが（写真8）、西側にはなく、壁だけである。西側妻面に渡り廊下が付いていたことと関連すると考えられるが、柱がないため、構造上は脆弱である。床下の換気口にも、上部にカバーのような装飾が見られるが、金網には、装飾は見られない。

校舎が徐々に鉄筋コンクリート化したり、規模を増すために建て替えられるという変化が現れたのは、1973（昭和48）年以降である。西尾高校の「本館」も、1978（昭和53）年9月に取り壊されている。

1982（昭和57）年10月に、「武道場」西側の渡り廊下



写真11 ベタ基礎と柱の打ち増し部分



写真12 更衣室の柱の打ち増し部分

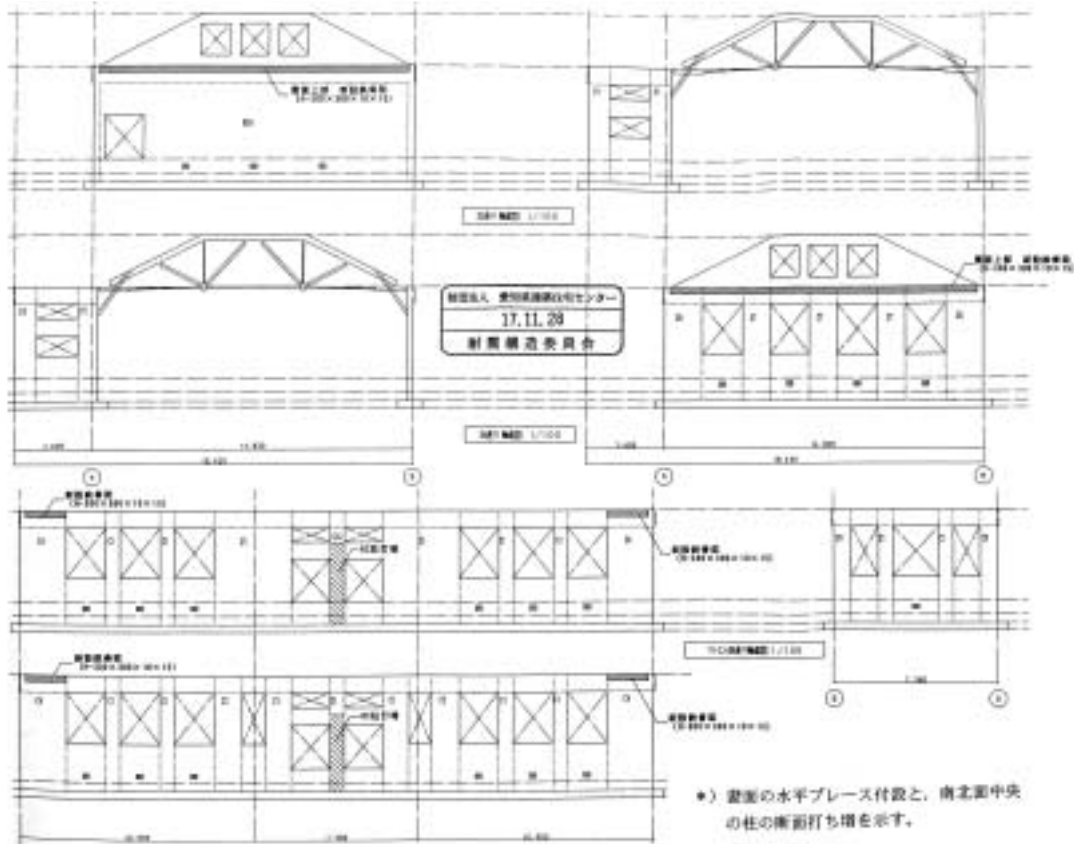


図6 改修後の屋内展開図

と昇降口が撤去され、翌1983（昭和58）年1月までの間、「武道場」の改修が行われた。南の正面入口部分を壁で閉じて東西を半分の規模の2室に分け、道場から出入りする更衣室とし、北側入口も含め、扉を鉄製に取り替えている。床を張り替え、基礎をベタ基礎に補強している（写真11）。瓦も葺き替え、木製の枠を付け加えてアルミサッシに変更している。この時に、西側の南の部分に出入口が設けられているが、これも付設されたのではないかと考えられる。

この改修時に作成された図面には、建物の亀裂などの破損状況が記録されているが、西壁面での亀裂、モルタルの浮きが多い結果となっている。しかし、全体に破損箇所は少なく、矢作川の南側に立地するにもか

かわらず、東南海地震（1944（昭和19）年）、三河地震（1945（昭和20）年）でも大きな損壊はなかったということから、強度の高い建築物であることが推測される。

西尾高校のすべての校舎を対象に、1985（平成7）年から2001（平成13）年にかけて、県による強度調査が実施され、耐震補強、改修工事の計画が策定された。「武道場」の耐震診断は1996（平成8）年に実施されたが、その結果は以下のようであった⁵⁾。

南と北の立面では、断面が小さい壁柱において構造耐震指標値（ I_s 値）が0.6前後になっているものの、力は余裕のある他の柱に流れるため、全体で構造耐震指標値を満たすと判断された。しかし、現状では、天井



図7 現在の碧南高校配置図

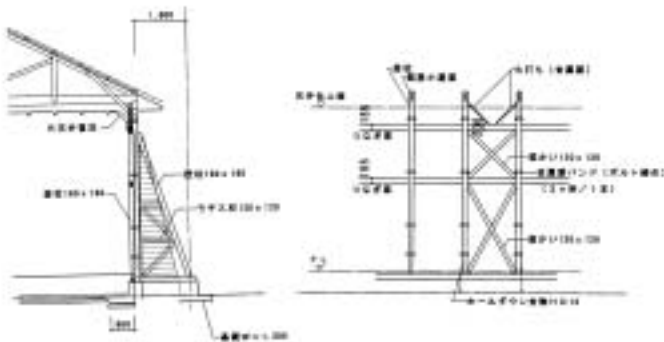


図8 木造袖壁による改修案

面の水平ブレース断面不足とアンカーボルトの断面が不足するため力が流れないこともあり、危険性も指摘されている。桁行き方向についてみると、西側の壁における構造耐震指標値は低くなっていた。しかし、どちらの妻面でも、水平方向に力を伝えられるようにすれば、両方向とも必要とされる構造耐震指標値を満たすことが可能、と判断されている。

この耐震診断結果を受け、2005（平成17）年に、愛知県は耐震改修計画を作成し、評定を受けている。改修計画内容は、竣工当時の外観を変えないことを条件とし、診断で指摘された点を改善するため、南北面中央の柱1本ずつを打増補強して断面積を増やし、妻面の水平力を端部の柱に伝えるため、東西両方の妻面内側に鉄骨の梁を付設するというものである（図6）。

以上のような評定と改修の計画を各建物ごとに作成し、2003（平成15）年の「体育館」から、順次、耐震補強・改修工事を実施した。2004（平成16）年から翌05（平成17）年にかけて「教室棟」を実施し、2006（昭和18）年に「本館」と「武道場」の改修を行っている。「武道場」の耐震・改修工事は、9月から翌年の2月にかけて行われた。評定を受けて妥当なものとして認定された方針に基づき、北と南の壁面について、それぞれの中央の柱を、外観や使い勝手を損なわないように太くし（写真12）、東西の壁面については、内側に鉄骨の梁を付設し剛性を高め、南北面に力が伝達されるようにしている（写真10）。内装については、木部や鉄製



写真13 「武道場」東立面



写真14 屋内北面



写真15 外部の袖壁



写真16 添柱により増加した壁厚

のブレース、金具などを塗り直したくらいで、大きな改修は行っていない。外壁についても、モルタルを補修し、塗装を塗り直しているだけで、瓦は替えていない。以上に要した工事費の総額は、1,510万円であった。

耐震工事内容についてみると、柱は太くなっているものの、北側は屋内側に、南は更衣室側に打増してい

るため目立たない。また、妻面に付けられた鉄骨は灰色に塗られている。もともと小屋組の中に鉄鋼が使用されていたために、小屋組の一部としてとけ込んでいると感じられる。無骨な感は否めないため、このような後で付加する部材は、可能な限り小さくすることが望まれる。

4.3 碧南高校「武道場」

碧南高校の「武道場」は1928（昭和3）年に建築されているが、木造・土壁の構造で、2006（平成18）年2月に耐震補強等の工事が終わっている。他の県立高校の「武道場」が鉄筋コンクリート造であるのと異なる理由は、学校の沿革にある。県立旧制中学の建築は、設置主体である愛知県営繕課で設計し、定型化したコンクリート造で建設したが、現・碧南高校の母体である1926（大正15）年開校の碧南国民学校は、地域の4町村の組合立で、県の営繕課は関与していなかったことによる。建築時には、4町村が共同して、地域の業者に依頼して設計・施工したので、彼らにとって技術的蓄積があった木造にしたと考えられる。その後、県に移管されたのは、1937（昭和12）年県立碧南商業学校としてであった。現在の配置図を、図7に示す。

「武道場」は木造・土壁造で、竣工当時には、南側妻面に入口となる小屋が、北側に収納と神棚が付属していた。南側が正面という位置付けで、南と東にも出入口が設けられていた。また、桁面の、東側には吹きさらしの廊下が付き、西側の袖壁とともに柱が外側に倒れるのを支えていた。大屋根は寄せ棟、南北の付属部分は切り妻屋根で、すべて瓦で葺かれていた。全体は、和風の雰囲気であるが（写真13）、南正面には、軒下部分などに洋風の装飾が見られる。屋内の天井は、立派な格天井で（写真14）、隅には文様状に空けられた通風口が設けられている。

その後、南の入口部分は屋内から入る部室とされ、他にも同様な部室が、南西部と北西部分に増築されていた。建物の老朽もみられ、基礎の土台が腐り、シロアリが発生していた。内壁東側の漆喰や、南側の天井にも破損が大きかった。増築した部室も傷んでおり、雨漏りもみられたという。伊勢湾台風の時には、南西角の屋根が破損したが、他の瓦は無事で、竣工時からの瓦は替えなくていい。

体育の授業や部活動では、南半分を柔道に、北半分を卓球に使用している。この高校では、剣道は取り上げていない。かつては式典にも使っていたが、1965（昭和40）年に「体育館」が完成してからは使用していない。

数年前、県から壊すという通知があったが、同窓会などで話すと反対が多かったため、県に働きかけて、耐震等の改善を行って活用することを認めてもらったという経緯がある。費用は県費で、同窓会からは出していない。工事費は、数千万円かかっているが、新築す

るより安くすむという結果が得られたことから、改修で実施されている。

耐震改修工事では、荷重を支える柱の断面積を増やすため、外部に鉄骨のブレースを立てる、内部に鉄骨の柱を立てる、外部に木造の袖壁を付け、内部に添柱を付ける、の3案を検討し、学校側として屋内外の変化が少ないの木造による方法を選択している（図8）。工事は、2005（平成15）年9月から翌2月までかかっている⁷⁾。

荷重を軽くするために、瓦を軽量なものに替え、土を落としている。そして、柱の断面積を増やすため、すべての柱の内側に同程度の太さの柱を添え、東西の桁面には袖壁を設置して、柱の外側への張り出しを防いでいる（写真15）。渡り廊下にも補強の支えを設置している。土壁も、断熱材を入れたサイディングに変えられている。屋内は若干狭くなり、壁厚が増えているが（写真16）、大きな変化は感じられない。また、窓サッシをアルミ製に変え、部活動の部屋を除去する等の改修も実施され、環境が向上している。

県側の取り壊しの方針を変えさせた学校側の熱意は大きい。2006（平成18）年の80周年記念誌でも、竣工時の写真が掲載され、重要な建築と位置付けていることがわかる。和風様式を混在させた木造の大規模な建築物が、保存され、活用されるようになった意義は大きい。

4.4 津島高校「講堂」

半田高校、西尾高校、碧南高校では、「武道場」が現存しているが、津島高校では「講堂」の方が残されている。また、校門も当時のまま残されているが、これは、西尾高校の正門と類似したものである。

津島高校の前身である県立第三中学校は、1900（明治33）年に開設されている。開設当時の校舎は、木造で、中庭を囲む配置であったが、火災により、大部分を消失させた。1923（大正12）年、津島中学としての鉄筋コンクリート造校舎が建築されている。設計担当は、現在の津島高校に残されている図面から、大中肇と判断された。

敷地の東側に運動場を、西側に校舎を配置していること、校舎を構成する建物の種類や配置などは、他の旧制中学の場合と同様である（図9）。「講堂」は、敷地の南西の隅に、松林の中に建っている。かつては東側の「本館」と廊下で結合されていたが、現在の「本館」は北側に移動して建て替えられているため、独立した記念館的な位置付けになっている。正門から「講堂」に至る部分には庭園が整備され、記念碑も配置されている。卒業生にとって、「講堂」と松林は、大切なものとして意識されている。

「講堂」は平屋であるが、天井は高く、2階分の広い空間になっている。躯体部分は鉄筋コンクリート造で、屋根の小屋組は木造で、瓦葺きになり、天井が張

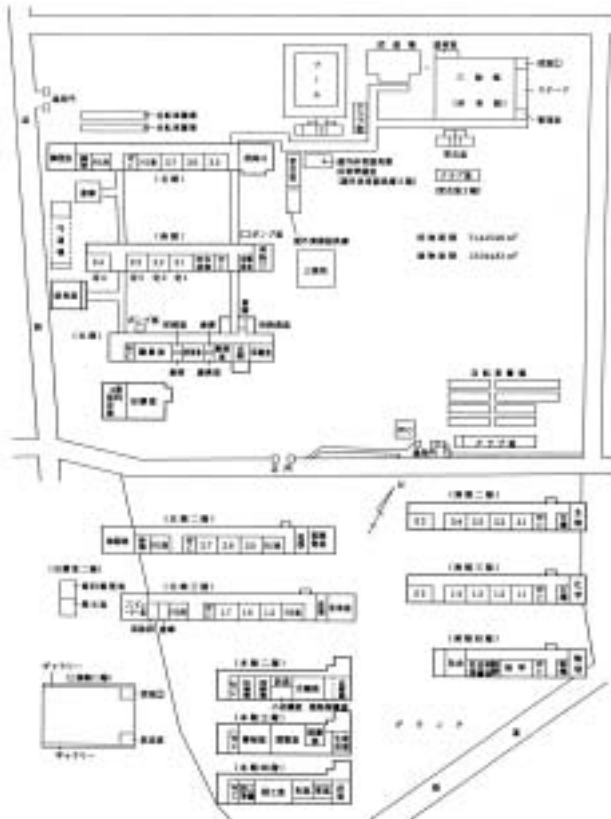


図9 現在の津島高校配置図

られている。

窓は大きいが、窓を除く壁面全体を、2階まで続く柱としてデザインし、2階の窓の上端の位置で柱飾りの装飾を設けている。柱、梁、窓といった識別が容易になされるため、すっきりした外観になっている。軒の部分は、4方とも中央部分に破風を設け、変化させている。破風の面には小さな通風口が設けられているが、平面が広く、単調な印象を与える。しかし、三角形の破風を支える位置に設けた和風と洋風を合わせた装飾は、全体を引き締めている。雨樋の断面は四角形で、柱の外側に付けられている。

東側の北に寄った入り口が最も大きく、正面を示すと思われる(写真17)。屋根は、新しく瓦で葺き直している。他の南北の入り口は、屋根を支える柱はなく、銅板で葺かれている。いずれの入り口の階段とも、立派な花崗岩で造られている。西面には入り口はなく、裏側であることを示している。西面の内壁に設置された2カ所の柱を見ると、内側に膨らみ、装飾を持っていることから、この部分に演壇が配置されていたと判断される。

窓枠は竣工時からのままで、細かい割付けで、木製である。「三中」という文字が入ったガラス窓や、迷彩を施したままのガラスが、現在も残っている。

現在、「講堂」は、1993(平成5)年に、西側1/4くらいの一部に鉄骨造で2階分の床を張り、1階を「卓球場」として、2階部分を「同窓会資料室」、その下階



写真17 「講堂」東立面



写真18 屋内西面



写真19 「同窓会資料展示室」内

を体育道具などを入れる「倉庫」として利用している(写真18)。「卓球場」にする前は、「柔道場」として使っていたが、1982(昭和57)年に、運動場の北側に「武道場」が建設されたため、卓球のための場を専用で確保することが可能になった。「卓球場」は、日中ばかりでなく、定時制の授業でも良く活用されている。この際の改造費は、1,500~2,000万円かかっているが、同窓会が負担した。卓球台は、相互に広い間隔をとり、ゆったりと配置されている。建物は重厚で、照明がないと暗く感じるが、天井も高いことから、落ち着いて試合・練習に集中できる環境を形成している。1階奥の「倉庫」には、たくさんの物品が収納されている。周囲に窓があるため、明るい。西側の壁の2本の柱が太く強調されているのが確認される。鉄骨の階段を昇った2階の「同窓会資料室」には、家具も配置され会議室の設えを行っている(写真19)。歴史的な写真や出版物などを展示し、建物の雰囲気とも合致して、同窓会

が使用するのには適した場になっている。2階全体に床を張り、同窓会が使うという話しもあるが、現在の規模で充分ということになっている。

2003(平成15)年に、同窓会が負担して1階床を張り替えた。2年前に雨漏りし、台風の時に瓦が飛ばされるということもあったが、修理・維持費は、大きくかかっていない。

卒業生にとっても懐かしい建築であるため、残していくことにしている。2005(平成17)年に耐震の調査を県が行ったが、結果は報告されていないという。躯体には小規模なひびはみられるものの、大きなものはなく、屋根や瓦も竣工時のままである。強固な建築で、建築当時の時代的な特徴を保っていることから、改修し、保存・活用していくことが必要と考えられる。

5.ま と め

本学の「武道場」をはじめとして、大正期から昭和初期にかけて愛知県内に建築された学校建築の事例を検討した結果、各々が、その時代の建築技術や様式を示す典型的な事例であり、学校の歴史を体現していることから重要な扱いをされていることが分かった。特に、コンクリート造の校舎は、わが国の建築構造が、レンガ造からコンクリート造へと変化していく時期に当たるもので、当時の技術を知る上で貴重な資料的価値がある。また、今日のコンクリート造建築と比較しても頑強で、質が高いことから、評価は高く、時代の要請に合致した改修を行い、今後も活用していくことが望まれる。

すでにみたように、西尾高校、碧南高校では耐震等の改修が行われ、新しい活用へと移行しており、他校でも、改修・活用の強い希望が出されていた。築50年以上の建築物を対象とし、日常的に使用しながら保存していくことを目的とした「登録有形文化財」制度が示す助成・優遇などを活用して、早急に改善・活用方策を検討し、実施に移すことが求められている。

註

- 1) 愛知教育大学歴史的建築物研究会(代表:小川正光): 本学に残る戦前建築物の歴史的検討と評価に関する研究, 愛知教育大学教育研究改革・改善プロジェクト経費報告書, 2003.3.
- 2) 本研究は, 2006(平成18)年度に, 本学の学長裁量経費である大学研究重点配分経費を受けて実施した研究成果の一部である。材料・耐震診断に関する検討も含め, 次の文献にまとめている。小川正光他: 本学に残る戦前建築物の耐震・材料の評価と活用方策に関する研究, 愛知教育大学教育研究改革・改善プロジェクト経費報告書, 2007.3.
- 3) 註1)に同じ。
- 4) 瀬口哲夫: 官庁建築家・愛知県営繕課の人々, C & D 出版,

2006.1.による。

- 5) 愛知県建築住宅センター: 平成8年度愛知県立学校耐震診断報告書 西尾高等学校武道場, 1996.10.
- 6) 豊田建築工房: 耐震改修計画評定資料 西尾高等学校武道場, 2005.11.
- 7) 碧南高等学校保管の資料による。

(平成19年9月13日受理)